

高木竜馬さん応援レポート

高木竜馬ピアノリサイタル

“ウィーンからの風”

2016年8月9日(火)
コンサートサロン パウゼ

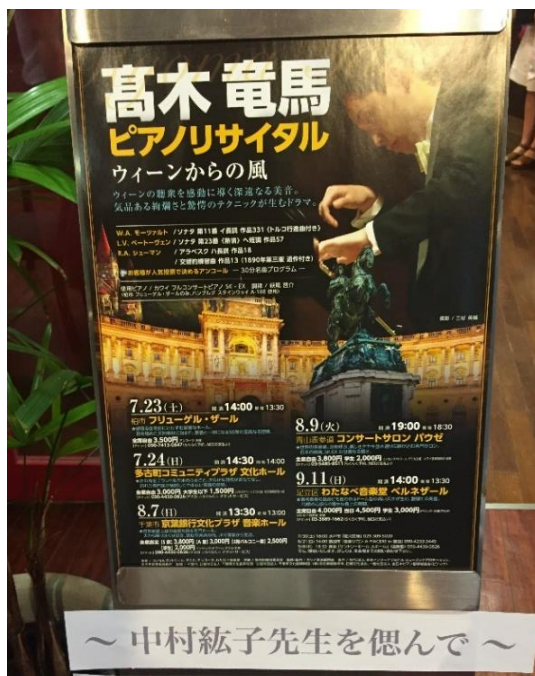
今夏のリサイタル・シリーズ第4弾

「高木竜馬 ピアノリサイタル」ウィーンからの風”。

高木さんのリサイタル・シリーズである。この夏は「・・・シューマン、 モーツァルト、 ベートーヴェン、それぞれの作曲家の変奏の巧みさを実際に音として表現できるよう頑張りたいという思いで取り組んでいます」と事前に語ってくれた高木さん。

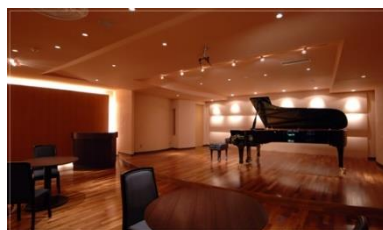
リサイタル・シリーズ第4弾となる本日の会場は、コンサートサロン「パウゼ」。カワイ表参道店の2F、表参道のケヤキ並木を眺めながらコンサートを楽しむことができるという洒落た空間である。

猛暑日となった暑い一日であったが、夕暮れの表参道の会場には、たくさんのお客様が列をなしている。



7月26日に届いた、中村紘子先生の訃報。名ピアニストにして日本のクラシック音楽界を牽引された恩師・中村紘子先生。この夏の一連のリサイタルは、中村先生に捧げるリサイタルへと変更された。

当初のプログラムに組まれていた前半のモーツァルトのソナタ 第11番 K.331 は、祝典的な曲調が特徴的な曲。追悼に相応しい厳粛な雰囲気を湛えるベートーヴェンのソナタ 第31番 Op.110 へと曲目変更。「いつもお優しかった先生を偲んで・・・」と高木さん。思いを込めての演奏が始まる。



恩師・中村紘子先生を偲んで。ダイナミックに繊細に



1曲目、ベートーヴェンのソナタ第23番『熱情』沸き上がるような情熱に満ちる名曲である。ときに激しくドラマティックに進む演奏に、ぐっと惹きつけられる客席。

次の曲はベートーヴェンのソナタ第31番。

高木さんが聴いた中村紘子先生最後の演奏は2015年3月の浜松国際ピアノアカデミー・オープニングコンサート。中村先生の病床からの復帰公演でもあった。ソナタ31番はその時に先生が弾かれた曲、また高木さんが中村先生から最後にレッスンを受けた時の曲でもあるとのこと。「ベートーヴェン本人の魂が天に昇っていくような曲です」と高木さん。高貴な調べが鳴り渡る。

続いてシューマンのアラベスク。「・・・ウィーンを訪れたシューマンが、ベートーヴェンとシューベルトの墓を訪ねたのちに作曲した曲です。二人に対する清廉な憧れ、天国で二人と静かに語り合っているような、芸術離れた世界を描いているように感じています」と高木さん。



「・・・できるだけ現実でないような、天国にいるような、天使がささやいているような雰囲気表現できたら」との言葉通り、なんとも美しい調べを聴かせてくれた。

プログラムラストの曲はシューマンの「交響的練習曲」。壮大な曲をダイナミックにかつ繊細に。ピアノの醍醐味に酔いしれる。



本プログラムに続いては、高木さんのリサイタルでは恒例のアンコール・タイム。事前のアンケートにより人気の高かった曲が演奏される。

モーツァルト：トルコ行進曲、ベートーヴェン：エリーゼのためにと、親しみある曲に小さなお子さんも熱心に聴き入る。ショパン：スケルツォ2番、ラフマニノフ/江口玲編曲：パガニーニの主題による狂詩曲より第18変奏曲、バラキレフ：東洋風幻想曲イスラメイと続く演奏に、「え？まだ弾いてくれるの？」と満席のお客様にはどよめきも。締めはショパンの英雄ポロネーズで全6曲。熱い演奏が繰り広げられた。

恩師へそして作曲者への思いと理解を込めて

終演の数日後、高木さんに話を聞いた；

一大熱演でしたね；

「・・・31番は自分が聴いた中村先生最後の演奏曲です。そのとき先生は病床からの半年ぶりのご復帰で。アカデミーの最中も、とてもお優しく温かく振舞われていらして。作曲当時のベートーヴェンと中村先生ご自身のご状況が重なるように思えて・・・」

「・・・曲の冒頭部分は極限まで音を温かくしようと思いながら弾きました。終楽章である3楽章では、こみあげてくるものがありました」

「・・・ソナタ「熱情」は本当に難しい曲で。分析をすればするほど、曲としてのあまりの完璧さに圧倒されます。曲全体の黄金比率というか、楽風がすばらしいので、少しでも手を加えると、バランスが崩れてしまいます」「・・・ベートーヴェンが死にたいという思いと、音楽のために生きなければいけないという思い、二律背反のなかでもがいている曲。最高傑作だと思っています。・・・自分自身、もがきながらこの曲を弾いていくと思います」

<演奏会概要>

◆出演

高木竜馬(Pf)

◆プログラム

L.V.ベートーヴェン ソナタ 第23番 作品57
“熱情”へ短調

L.V.ベートーヴェン ソナタ 第31番 変イ長調
作品110

R.シューマン アラベスク 作品18 ハ長調

R.シューマン 交響的練習曲 作品13

(1890年 第三版 遺作付き)

◆アンコール

モーツァルト トルコ行進曲

ベートーヴェン エリーゼのために

ショパン スケルツォ2番

ラフマニノフ/江口玲編曲

パガニーニの主題による狂詩曲より

第18変奏曲

バラキレフ 東洋風幻想曲イスラメイ

ショパン 英雄ポロネーズ



「・・・どの曲も小さい頃から弾いている曲なのですが、留学してから顕著に違いを感じる部分がたくさんあります。シューマンの交響的練習曲、この曲などは、先生から『少し変態的に(笑)』弾くようなアドバイスをいただいたりしています。音色をたくさん変化させたり、響きの場所を変えてみたりといった、自由さを加えています」。

翌々日はサクソの方との共演を控えていた高木さん、今年の夏もますますの充実ぶりであった。

高木さん、素敵な演奏でした。
また聴かせてください！



高木 竜馬

ピアノリサイタル

ウィーンからの風

ウィーンの聴衆を感動に導く深遠なる美音。
気品ある絢爛さと驚愕のテクニックが生むドラマ。

W.A. モーツァルト / ソナタ 第11番 イ長調 作品331 (トルコ行進曲付き)

L.V. ベートーヴェン / ソナタ 第23番《熱情》ヘ短調 作品57

R.A. シューマン / アラベスク 八長調 作品18

/ 交響的練習曲 作品13 (1890年第三版 遺作付き)

★お客様が人気投票で決めるアンコール — 30分名曲プログラム —

使用ピアノ / カワイ フルコンサートピアノ SK-EX 調律 / 萩尾 啓介
(柏市 フリュージュル・ザールのみ、ハンブルグ スタインウェイ A-188 使用)

撮影 / 三好 英輔

7.23(土)

開演 14:00 終演 13:30

柏市 **フリュージュル・ザール**

★緑豊かな住宅街にたたずむ豪華なホール。
質を極めた天然素材に包まれ、観客と一体になる50席の至高なる空間。

全席自由 3,500円 アンコール 全席
[チケット] 090-7413-0847 (早く予約、当日お支払い)

7.24(日)

開演 14:30 終演 14:00

多古町**コミュニティプラザ 文化ホール**

★かの有名なブランド多古米のふるさと、大らかな自然がおもてなし。
訪れた専門家が絶賛してやまない奇蹟の音楽。

全席自由 3,000円 大学生以下 1,500円 コンサルトホール プレミアム 全席前座特等
[チケット] 090-4430-0826 (早みか 早く予約、当日お支払い)

8.7(日)

開演 13:30 終演 13:00

千葉市 **京葉銀行文化プラザ 音楽ホール**

★首都圏最上級の音楽を誇る名門ホール。
天から降り注ぐ如き、感動の美音の結晶。JR千葉駅から至近。

全席指定 [S席] 3,800円 [A席] 3,000円 [2階バルコニー席] 2,500円
[学生] 2,000円 コンサルトホール プレミアム 全席
[チケット] 090-4430-0826 (早みか 早く予約、当日お支払い)

主催 / コンサルトホール プレミアム、アンコール、わたなべ音楽堂 共催 / 多古町音楽委員会 協賛・協力 / カワイ音楽振興会 協力 / NPO法人 多古インターナショナル・ミュージックプロジェクト、多古町音楽協同組合 後援 / 千葉市、公益財団法人 千葉県文化振興財団、公益財団法人 千葉市文化振興財団、(株)河合楽器製作所、日産文化協会、一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)

8.9(火)

開演 19:00 終演 18:30

青山表参道 **コンサートサロン パウゼ**

★世界の表参道。涼を呼ぶ、美しきヤマキ並木通りに囲む名門サロン。
日本の銘器、SK-EX の甘美なる音色。

全席自由 3,800円 学生 2,000円 コンサルトホール プレミアム 全席前座特等
[チケット] 03-5485-8511 (早く予約、当日お支払い)

9.11(日)

開演 14:00 終演 13:30

足立区 **わたなべ音楽堂 ベルネザール**

★著名奏者の録音にも使われるドーム型の高い天井が生む、酸欠たる美音。
70席の心安らぐ極上の極上の時間。

全席自由 4,000円 当日 4,500円 学生 3,000円 (ドリンク・お菓子付き)
わたなべ音楽堂 主催
[チケット] 03-3889-1662 (早く予約、当日お支払い)

7/30(土) 18:00 水戸市「佐川文庫」029-309-5020

8/21(日) 14:00 豊田市「音楽サロン A-PIACERE in 豊田」090-4233-3445

9/8(木) 18:30 赤塚「サントリーホール 大ホール」(協賛) 090-4430-0826

でも、開催いたします。詳しくは、各会場までお問い合わせ下さい。



【コンサート・プログラム】

曲として出版されます。今回演奏するブラームスの校訂による、90年に出版された第三版には、初版の出版の際に、作曲されながらも出版に至らなかった5つの変奏曲が追加として加えられています。

この曲の主題は、1834年から35年にかけて相思相愛の関係にあったエルネスティーネ・フォン・フリッケン嬢の父君、フリッケン男爵作曲の「フルートとピアノのための主題と変奏」の旋律が採用されています。エルネスティーネの出身地であるボヘミア国境近くの町アッシュー - ASCH - は、スベルの里でもシューマン - Schumann - の名前に含まれていることもあり、「謝肉祭 - 4つの音音による愉快な情景 - 作品9」の4つの音音に当てはめ、曲の全体に散りばめられます。またエルネスティーネ自身も「エストレラ - Estrella -」の名前で、この「謝肉祭」に登場します。しかし、この曲が出版された37年には、エルネスティーネが男爵家の非嫡出子であり、その複雑な家庭の内情をシューマンに話してはなかったことなどが起因し、既に交際関係は終わっていたため、主題には小さくあるアマチュアの主題による「とらふ日記」が記されたまま、シューマンの交響曲の創作は、実際に出版に至った1841年の交響曲「第1番」や「第4番」において大きく開花しますが、創作のご初期より、管弦楽に対しての興味をもちかけています。ピアノ曲を作曲する途次以前には、既に交響曲のスケッチも存在しており、ピアノ曲の作曲が盛んだった32年には「ツヴァイカワ交響曲」が完成しています。ピアノ曲においても、管弦楽の技法は積極的に移入され、交響的イメージに飽きられている部分が多く存在します。幼少時より管弦楽に通じ、ベートーヴェンの交響曲群に大きな感動を覚えていたシューマンの心のホールには、百花の楽器が織りなす健やかで重厚な音楽が、鳴り響いていくに違いないと想像されます。

フランク・リストが、シューマンを「変奏曲におけるベートーヴェンの後継者」と位置付けていたように、最初期の未出版の曲も含め多くの変奏曲を書いている。それらの経緯を経て、シューマンは主題を発展させていく巧みな能力を、存分に切磨いていきました。また、小曲を進めることで、性格的でありながら、文学的、哲学的な関連性から深みに達し、一つの曲を構成させていく技法も、同時代において抜きん出ています。この「交響的練習曲」を含め、「謝肉祭」や「クライスレリアーナ」「フロレスカ」等でも、それらの特性は顕著に表れています。交響曲の作曲も経験し、変奏の技法や構成力にも磨きをかけて、調を持って世に問うたこの作品は、大きく広げられてきた傑作です。

主題: Andante 嬰ハ短調 4/4拍子

全曲を支配する主題により、あたかもワルムの如き暖かさに包まれ、曲はその始まりを告げます。弦楽合奏のような厚みのある響きと密制性の積み、しかしそこに柔らかな調と温かさも交錯し、これから無限の発展を見せるであろう曲の性格が、見事に決定付けられています。

第1変奏曲: Un poco più vivo 嬰ハ短調 4/4拍子

ピアノシメで Misterioso な雰囲気の中、リズムに特徴をもつ動機が提示されます。元来「進走」の意味をもつフーガが主題に用いられており、これから「長いさすらい」を始めるに相応しい変奏曲です。

連作 第1変奏曲: 嬰ハ短調 4/4拍子

流動的な右手に特徴が現れるこの変奏曲によって、まだ気付かぬ「荒波の歌動」を、私たちに予感させるかのようです。

第2変奏曲: 嬰ハ短調 4/4拍子

右手によって旋律が歌われ、左手では主題が奏される中、16分音符の内声部が、躍動感と共に高まる鼓動のように、曲に存在し続けます。旋律では、鋭いリズムが提示されます。これは続く連作の第2変奏曲及び第3変奏曲においても、継続して使われます。

連作 第2変奏曲: 嬰ハ長調 12/4拍子

嬰ハ短調の調号を持ちながら、嬰ハ長調で始まり、嬰ハ長調で終わる特異なこの変奏曲は、教会の鐘の音を模した伴奏系に導かれ、オイゼビウスとフロレスタンの会話が二度続き、主題が現れます。これは、主調である嬰ハ短調の同主調であり、重要な意味をもつ変ニ長調のエンハーモニク調（異名同音）でもあります。変ニ長調の登場は、暫く待たねばなりませんが、嬰ハ長調での静かな終わりにて、変ニ長調の将来的な登場を予期させています。

連作 第3変奏曲: 嬰ハ短調 12/8拍子

中間部では美しい調性の移り合いを見えますが、終結部では力強い（嬰ハ短調で終わります。第2変奏曲の中間部との関連性が認められ、美しさの中にもリズムがもつ厳しさが内在しています。

第3変奏曲: Vivace 嬰ハ短調 2/4拍子

ヴァイオリンのスピカト（弓を跳ねさせて、上下行する細かいスタカートを表現する技術）を模した右手に、左手は弦楽二重奏による旋律が展開されます。中間部は連作の第1変奏曲の伴奏系のように、荒々しい流れが表現されます。

第4変奏曲: 嬰ハ短調 4/4拍子

拍音のカノンによって構成され、各カノンの頭にはスフォルツァンドを伴い、緊迫感を保ちながら行進を進めます。途中でフナーレの断片も現れますが、なだれ込むように次の変奏曲へと突入します。

第5変奏曲: 嬰ハ短調 12/8拍子

前変奏曲に続くカノンが特徴的ですが、スフォルツァンドの指示があり、まるで感情が飛び跳ねるような軽快な動きが特徴的です。中間部にあるスフォルツァンドや、ピアノからフォルテへの急激なクレッシェンドによって、意外性に富んだ変奏曲です。

第6変奏曲: Agitato 嬰ハ短調 2/4拍子

一変して、嵐が湧き起こるような熱狂的な変奏曲です。悪魔が野人となって追い掛け廻すかのような荒々しさで、左手のスフォルツァンドが拍をずらしてカノンが進むため、まるで右手と左手が互いに噛み付き合っているようです。

第7変奏曲: Allegro molto 変ニ長調 2/4拍子

全曲中、唯一の半長調によって隔られる「歓喜の巻」は、内声部の半音階に大きな特徴をもちます。変ニ長調のような英雄的な性格を有し、俊敏な動きの中、人の歓びが高らかに歌われます。

第8変奏曲: 嬰ハ短調 4/4拍子

歓喜の巻には、絶望が容赦なく襲い掛かります。「最後の審判」の時のような威かな雰囲気、絶望感、受難、痛みが曲を重く支配します。

連作 第4変奏曲: 嬰ハ短調 3/4拍子

涙が零れ落ちるような右手の旋律と、それでも重い足を引きずりながらも、歩みを続けなければならない厳しさが曲に表れます。後半部分は、その運命に抗うように、右手はアレグロ・モートロを伴い、少しずつ上行していきますが、判断それは破れ、嘆きの歌へと戻されます。

連作 第5変奏曲: 変ニ長調 4/4拍子

曲中で最も甘美なこの変奏曲は、ノスタルジーに陥られ、「永遠」といえる遠過ぎる距離にあるあの世界」を、意味する変ニ長調によって描かれます。シューマンの数々の一つとも言うべき表現方法で、いや高まる鼓動が表され、天へ駆けあがる上昇音型によって強まる生命力が高らかに宣言されます。この曲の主要なメロディと、上昇音型は、同時代の作曲家ハイリッヒ・マルシャーによるオペラ「聖女騎士とエジプトの女」の「アラア」から採用されています。「王は闘いを通して、尊敬と栄誉を勝ち取った」と謳われる一部は、まさにこのフナーレに相応しい音楽です。三度に見る主題提示のそれぞれの間には、リズムが継承されながらも私的な響きをもつ、美しい旋律が展開していきます。主題部は、三度目になり初めて半音の上昇を果たし、急速にコーダへと向かい、ついにこの大曲は静然と結ばれます。

第9変奏曲: Presto possibile 嬰ハ短調 3/16拍子

変ニ長調の幻想の世界を打ち破るには、「可能な限り速く」と指示され、イダナツ・モシエスやニコロ・ハグエーニの演奏を通してシューマンが憧れたヴァルティオリーズで、四声部が飛び回ります。しかし、最後は消え入るように突然の終わりを告げます。

第10変奏曲: 嬰ハ短調 4/4拍子

「常にエネルギーに」と指示され、左手の全音と半音の織りなす純のようなうねりが特徴的な変奏曲です。前半部は半長調で終わりますが、後半部は無情なまでに響き渡る嬰ハ短調の主拍音で、曲は終わります。

第11変奏曲: ト短調 4/4拍子

「速くから風が吹き荒んでくるかのような」不気味な左手の音型に乗せられて歌う右手は「嘆きの調へ」です。嘆きの二重奏になり、曲は大きな盛り上がりを見せますが、最後は消え入るように結ばれます。

フィナーレ: Allegro brillante 変ニ長調 4/4拍子

突如として世界は一変し、大団円を迎えるに相応しい曲調に満ちた活力溢れるフナーレが始まります。リズムパターンの歌謡的なまでの反復は、シューマンの数々の一つとも言うべき表現方法で、いや高まる鼓動が表され、天へ駆けあがる上昇音型によって強まる生命力が高らかに宣言されます。この曲の主要なメロディと、上昇音型は、同時代の作曲家ハイリッヒ・マルシャーによるオペラ「聖女騎士とエジプトの女」の「アラア」から採用されています。「王は闘いを通して、尊敬と栄誉を勝ち取った」と謳われる一部は、まさにこのフナーレに相応しい音楽です。三度に見る主題提示のそれぞれの間には、リズムが継承されながらも私的な響きをもつ、美しい旋律が展開していきます。主題部は、三度目になり初めて半音の上昇を果たし、急速にコーダへと向かい、ついにこの大曲は静然と結ばれます。

本楽曲解説中、誤りや研究不足の点がございましたら、ご指摘下さいますようお願い申し上げます。
piano.ryoma@gmail.com 高木 竜馬

2016年

♣ 7月23日 (土)	14時 開演	柏市 フリューゲル・ザール	主催 / アンコウ
♣ 7月24日 (日)	14時30分 開演	香取郡 多古町コミュニティプラザ 文化ホール	主催 / コンセルヴァトワール デミカ 共催 / 多古町教育委員会
♣ 7月30日 (土)	18時 開演	水戸市 佐川文庫	主催 / 佐川文庫
♣ 8月7日 (日)	13時30分 開演	千葉市 京葉銀行 文化プラザ 音楽ホール	主催 / コンセルヴァトワール デミカ
♣ 8月9日 (火)	19時 開演	青山 カワイ表参道 コンサートサロン「パウゼ」	主催 / コンセルヴァトワール デミカ 協賛 / カワイ音楽振興会
♣ 8月21日 (日)	14時 開演	豊田市 音楽サロン A・PIACERE in 豊田	主催 / 音楽サロン A・PIACERE in 豊田
♣ 9月11日 (日)	14時 開演	足立区 わたなべ音楽堂 Belline Saal	主催 / わたなべ音楽堂

いつもお優しかった中村絃子先生の、
天に昇りて空となった魂魄に捧げます。

ベートーヴェン / ピアノソナタ 第31番 変イ長調 作品110

Ludwig van Beethoven Sonate für Klavier Nr.31 As-Dur Op.110

ベートーヴェン51歳の1821年に完成したこの円熟のソナタは、数少ない後期作品の中核をなし、「第30番 ホ長調」「第32番 へ短調」と併せ、「ベートーヴェン後期ピアノソナタ三部作」と畏敬の念をもって呼ばれています。この「三部作」以降、かの有名な「二短調交響曲第9番《合唱》」を完成させるや、ベートーヴェンの筆は、もっぱら晩期「弦楽四重奏曲」の孤高へと向います。この曲が作られた前年から、ベートーヴェンは聴力を完全に失います。6年後にベートーヴェンの命を奪った肝臓病の症状である黄疸も発症し始めるなど、健康状態は思わしくありません。しかし、この時期にベートーヴェンの描いた音楽は、全く厭世的なものでもないどころか、その多くが、希望や欲びや温かさをもって曲を終えています。この作品においても同じであり、あたかも私たちそれぞれが心に抱く「希望の歌」を、私たちに代わって天へと届けてくれるかのような主和音で、華やかに曲は結ばれます。自らの生涯を懸けて歩み続けた聖型の軌跡から生まれ出た曲たちが、後世の私たちにあって「魂の昇天の記念碑」になることを、ベートーヴェンは信じて疑わなかったに違いありません。

第1楽章 / Moderato cantabile molto espressivo ソナタ形式 変イ長調 4分の3拍子

ベートーヴェンのピアノソナタ中、唯一 モデラートの「第1主題」を持つこの楽章には、ピアノソナタ第28番のようなとても美しいメロディが与えられています。冒頭4小節には、「序奏的主題」が置かれていますが、これは第1楽章のみならず、全曲を支配している極めて重要な「主題動機」です。そして5小節目から主部が始まり、「第1主題」が奏でられます。まるで積極的で明るい性格の全てを、包含したようなこの主題からは、ベートーヴェンの天賦の旋律性が、尽きることのない泉のように溢れ出ています。その後、下降音形の32分音符の「アルペジオ動機」により「推移部」に入りますが、この「動機」もまたその後の発展につながる重要なものです。「第2主題」は、半音階を交えたオクターブ進行により、左右両手が呼応しながら進んでいきます。「展開部」では、「序奏的主題」の形が崩されることなく、「第2主題」から引用された地の底を這い回るような左手に支えられながら、巧みに移調しつつ「再現部」へと向かいます。「再現部」では、右手が「序奏的主題」を、左手が32分音符のアルペジオを用いて、2つの「主題動機」を見事に融合し再現します。「コーダ」は、32分音符のアルペジオが提示部と同じ主調でクレシェンドされつつ奏され、その後 subito p で「序奏的主題」と「第2主題」が、感動的な再会を果たし、曲は閉じられます。

第2楽章 / Allegro molto へ短調 4分の2拍子

「主題」は、4小節×2で構成されていて、第1グループがpで不気味に「順次進行」していくのに対して、第2グループは、「跳躍進行」を含むfで、決然と力強く提示されます。「不気味さ」と「決然」は、その後の展開でも、代わる代わるに登場します。中間部では、右手は下降音形で、左手は、単音による上昇音形をとってffとpで、行きつ戻りつ奏されますが、決定打を得られないまま、消え入るように、「主部」の「再現」へと向かいます。「主部」の「再現」が終わり「コーダ」に入ると、へ短調の和音が力強く奏されますが、突然のへ長調の救済により、曲は、第3楽章へと向かいます。

第3楽章 / Adagio ma non troppo - Fuga. Allegro ma non troppo

フーガ形式 変イ長調 4分の4拍子-8分の6拍子

後期ベートーヴェンの真髄とも言えるこの3楽章は、「哀しみの歌」を中心とするAdagioの「第1部」と、偉大な「フーガ」が展開される「欲びの歌」の「第2部」とに分かれます。「第1部」は自由な形式の「遠い過去への郷愁」であり、「第2部」は人知を遥かに超え神性さえ帯びる厳格な「フーガ」が導く「人々の希望と昇天」です。極めて自由な形で書かれている「第1部」は、レスタティーボを取り入れるなど、自己の内面に深く問いかけるかのように曲が進んでいきます。変イ短調による「哀しみの歌」では、晩年のベートーヴェンの苦悩と哀しみが歌われます。この歌が終わるや否や、微かな希望の光が差し込み、いよいよ変イ長調による偉大な「フーガ」が始まります。3声部の「フーガ」は、堂々と顔を挙げ胸を張り、静かに、しかし着実に、希望の地へと私たちを導きます。しかし、盛り上がりを見せたところで、苦悩が取り憑いて離れないかのように、再度「哀しみの歌」がト短調で奏されます。その中にあっても、装飾音を巧みに扱い、哀しみの中だからこそ光る美しさが表出されます。「哀しみの歌」が終わると、ト長調の主和音が「神々のコラール」のように響き渡り、ふっと霧が晴れるかのように「フーガ」の主題の逆行形が登場します。拡大縮小を自在に繰り返しながら徐々に推進力を増し、「昇天の変イ長調」で、「私たちの希望」は浄化され「薄らぎて空になり」、ついに「天へと昇る天の許し」を受け取るのです。

高木 竜馬